

ふじのくに地球環境史ミュージアムにおける標本収集

柴 正博

現在のふじのくに地球環境史ミュージアム（以後「ミュージアム」）の所蔵標本は、60万点ともいわれ、多数を数えています（図1）。しかし、それらのほとんどは2003年度から県の事業として始められた散逸の危惧される自然標本の保存事業とそれ以後も継続されている個人収蔵標本の県標本化によるものです。

昨年度に、ミニ博物館展示資料作成事業で県内の砂や岩石の展示作成（図2）に携わり、ミュージアムの標本の中に県内各地の砂や岩石がどれくらいあるかを調べてみると、標本の採集場所や種類に偏りがあり、また展示用の標本にできるものが非常に少ないことに気づきました。それは、上述したように、ミュージアムの収集標本がおもに個人の収集標本だったことに理由があります。

幸い、静岡県地学会の寄贈標本の中にいくつか県内の鉱山の鉱石標本や火山岩標本があり、ミニ博物館の展示作成に関しては助かりました。しかし、伊豆半島の岩石や化石、赤石山脈を構成する四万十帯や、浜松地域に分布する秩父帯、三波川帯などの堆積岩や火成岩、変成岩がなく、大変苦労しました。

標本とは珍しいものや貴重なものだけでなく、その地域で普通にみられるもの、すなわちそれはその地域の特徴を示すものであるため、そのような標本は非常に重要です。その意味で、静岡県の特徴として、各地域で普通に見られる岩石や地層の標本を採集することの重要性を痛感しました。

すでに、「自然史しずおか」の第39号に書いたことですが、一般に自然史博物館における本来の標本収集とは、すでにある標本を収集することではなく、ある研究目的のために行われるものです。大阪市立自然史博物館の館長だった千地万造氏（1978）は、「博物館の調査研究の副産物として資料が収集され、その結果さらに次の段階の資料収集に引き継がれる。」と述べています。すなわち、博物館はある研究対象（もの）についての研究を中心に、その資料を収集保管し、それをもと



図1 ミュージアムの岩石標本収蔵室



図2 ミニ博物館のケース展示

に教育と展示を行う複合機関（柴，2001）であるため、千地氏が言うように資料（標本）は博物館の研究により収集され、それは博物館の活動を発展させていくために必要なものとなります。

今後、ミュージアムで収集され整理される標本は、個人の研究や興味で集められたものだけでなく、静岡県の自然を知るために必要な標本や、静岡県の自然すべてを研究する目的で体系化され採集されるべき標本だと思えます。

いくつかの博物館では、博物館がその設置目的のために必要と考えて、その博物館の組織を動員して行う調査研究があります。これは博物館の機関研究と呼ばれ、例えば栃木県立博物館の機関研究として、県内をいくつかの地域に分けて、その各地域で行われた総合調査がこれにあたります。この機関研究は、ひとつの地域について3～4年かけて調査を行いその地域の地質、植物、動物などの分布の概要と特徴を報告書にまとめるもので、調査研究については博物館の学芸員以外に調査研究協力員制度を設けて外部のアマチュアや研究者を加えて行われます（青島，1991）。

同様の例は、神奈川県立博物館が中心になって市民参加で行われた『神奈川県植物誌』の編纂（大場，1987）、横須賀市立自然博物館が行った『三浦半島活断層研究会』の活動（蟹江，1998）、川崎市青少年科学館の市民による専門研究グループにより行われた『地域自然環境調査』（川崎市青少年科学館，1994）などがあげられます。

ミュージアムは、静岡県の自然のすばらしさを県民に知らせ、それを大切にしていこうとする活動をするところ（機関）だと思えます。そのためには、静岡県の自然環境の現状をより詳しく知って、その標本を系統的に収集保存する必要がある、いくつかの博物館で行われている機関研究をミュージアムの研究活動の中心に据えて、計画的に静岡県全体の現在の状態を把握し、その調査で明らかになった重要な地域やテーマについて詳細の研究を継続的に行っていくことが必要と考えます。

地域の自然環境の姿や仕組みについての研究は、ひとつの機関や個人でできる仕事ではなく、地域の人々の協力や研究への参加が必

要です。博物館の調査研究活動に関しては、大学の研究者や学生だけでなく、地域の人々も含めた活動を展開できるのが博物館の特徴でもあると考えます。

そのために、博物館ではこれらの研究とともに、その成果を博物館の研究報告や普及誌などで公表し、さらに展示や教育活動を行う中から多くの協力者を得て、後継者を育てる必要があります。そして、博物館を地域の人々に開かれた研究と教育の場として提供し、さらに活動の展開をはかるべきではないでしょうか。ローカルな研究なくしてグローバルな研究はなく、また反対にグローバルな見識がなくローカルな研究の発展はないと思えます。このような総合的な研究教育活動を博物館は担えるところと信じます。

地域の人たちが協力者として参加するこのような研究会の活動では、学芸員は専門研究者であることはもちろん、調査研究のリーダーとして研究会のまとめ役であり、スタッフ養成の教育者としての役割があります。また、施設としての博物館は研究会の活動拠点となります。それが、「100年後」を目指したこのミュージアムの本来の姿ではないでしょうか。

引用文献

- 青島陸治（1991）博物館の地域調査と普及活動。月刊地球，13：708-713。
- 千地万造（1978）4 自然史系博物館 博物館学講座第5 調査・研究と資料の収集。159-183，雄山閣出版
- 蟹江康光（1998）博物館における研究の重要性，亜深海の貝類を研究素材にーグローバルからローカルへー。地質ニュース，532：58-61。
- 川崎市青少年科学館（1994）川崎市自然環境調査報告Ⅲ。川崎市教育委員会。
- 大場達之（1985）神奈川県植物相を調べる - 神奈川県植物誌の編纂 -。神奈川県立博物館だより，87：222-224。
- 柴 正博（2001）Ⅲ 館種別博物館の調査研究 自然史博物館 新版博物館学講座6，博物館調査研究法，91-101，雄山閣出版。